



映像文化の研究は、過去につくられた映像にアクセスできてはじめて可能になります。この当然と捉えられがちな前提を根底から支えているもののひとつが、フィルム・アーカイヴの活動です。映画という表現形態が、もっぱらフィルムというモノによって担われていた20世紀を経て、現在では映画は他のさまざまな形態の映像とともにデジタルメディアに居を移しており、その保存や復元のあり方も大きく変わってきています。映画を後世に残すこと、アクセス可能にすることという、フィルム・アーカイヴの二つの使命の最前線について、国際的な視座から論じます。

デジタル時代における 映画の 保存と 復元

2018年
10月30日(火)
13:00-14:30
関西大学
千里山キャンパス
第一学舎 5号館
6階 E601教室

【主催】 関西大学文学部

【問合せ先】 関西大学文学部映像文化専修 堀潤之 hori@kansai-u.ac.jp

【関連イベント】

神戸発掘映画祭2018 10月20日(土)・21日(日)、26日(金)～28日(日)
10月27日(土)

13:00-14:00 常石史子氏講演

「フィルムが語る——無声映画の「リコンストラクション」」

【会場=神戸映画資料館】

14:30-16:30 『オーラックの手(芸術と手術)』オーストリア国立アーカイブ所蔵
デジタル復元最新版ワールド・プレミア上映

【会場=ArtTheater dB Kobe】

常石史子

【講師】



常石史子 | つねいしふみこ

1973年生まれ。ウィーン在住。東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退。専攻は表象文化論、映画史。2000年、東京国立近代美術館フィルムセンター（現・国立映画アーカイブ）研究員に着任、主にフィルムの収集・復元に携わり、日本映画で初のデジタル復元を手がける。2006年よりオーストリアの国立フィルム・アーカイヴ、フィルムアルヒーフ・オーストリアに移籍、2014年より技術部長。映画フィルムのデジタル化、デジタル復元、およびデジタル・アーカイヴ構築の指揮を執る。